大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

中国における松陰像

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 洪, 偉民 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004342

中国における松陰像

洪　　偉　民

はじめに

中国における吉田松陰（以下、松陰）（1830 ～ 1859）の研究は近代と現代との二つの時期に分けられる。その二つの時期に松陰はまったく違ったイメージで受け取られている。

松陰は明治維新の先駆者として明治政府に高く評価された。また松陰の弟子たちが彼を顕彰したことに、明治維新を模範とし、目標とした中国でも高く評価された。清末の改革志士の黄遵憲、康有為、梁啓超たちにも大きな影響を与えた[1]。そして松陰を中国の章炳麟（1868 ～ 1936）に例えた人もいる[2]。

一方、近代に入ると松陰像は一変した。幕末志士を肯定する一方で、彼の「海外拡張論」により、松陰のイメージは軍国主義者や侵略主張者などに替わった[3]。

では、なぜ、松陰の像は異なったのだろう。

一、近代中国の松陰像[4]

近代中国の松陰像については、『吉田松陰と近代中国』[5]、「近代中国における松陰像」[6]、「過渡時代の英雄――梁啓超の目にある吉田松陰」[7]、「梁啓超の日本観」[8]、「梁啓超における日本

1　朱謙之『日本的古学及陽明学』上海人民出版社、1962 年、P.384。

2　源了圓『徳川思想小史』には「象山は清朝下の洋務派、小楠は変法派、松陰は排満派に相当する。（中略）松陰の思想は洋務派や変法派にあきたりず、清朝政府打倒以外に道はないとした章炳麟と一脈相通ずるところにあるだろう」とある。中央公論社、1973 年、P.223。

3　例えば、拙論「求道与殉道」（『日本研究』、1996 年第 3 期）に最後の部分に「日本軍国主義者」、「侵略」といった言葉を加えないと発表できない、と言われたことがある。また、魯霞「論吉田松陰対『孟子』的解読」、『日本研究』、2004 年第 4 期；李月・劉家鑫「吉田松陰教育思想的双重性質論析」、『語文学刊』、2011 年第 8 期；劉煥明「日俄之戦与“大陸政策”」、『江海学刊』、2008 年第 4 期；張躍武「甲午戦争与台湾問題」、『大連大学学報』、2014 年 10 月などが挙げられる。

4　近代中国における松陰像については、郭連友『吉田松陰と近代中国』（中国社会科学出版社、2007 年 3 月、PP.144 ～ 199 参照）、邢永鳳、「近代中国における松蔭像」（『山口県地方史研究』第九十号、2003 年 10 月、PP.41 ～ 53 参照）などが挙げられる。本文は両氏の研究を大いに参考した。

5　前掲、『吉田松陰と近代中国』、2007 年 3 月。

6　前掲、『山口県地方史研究』、2003 年 10 月。

7　張艶茹、『日本問題研究』、2001 年第二期。

8　班瑋、『天津師範大学学報』（社会科学版）、2004 年第四期。

近代志士精神の探求と消化」[9]、「梁啓超と日本の明治維新」[10]、「黄遵憲の日本観について」[11]、『高旭の詩詞における「西方」』[12] などの先行研究がある。

なかでも黄遵憲・康有為・梁啓超・高啓らは、松陰を高く評価し、松陰を中国の英雄とまで称している。

1．黄遵憲の松陰像

松陰を初めて中国に紹介したのは黄遵憲（1848 ～ 1905）である。彼は 1877 年に清の駐日公使何如璋の書記官として来日した。のち、1864 ～ 1904 年の間に作った詩作が『人境盧詩草』という名で日本出版された。その中の「近世愛国志士歌」では、11 人の「愛国者」が選ばれ、その事跡を賛美しようとしている。松陰はその中の一人である[13]。

> 丈夫は志向を抱いていたにもかかわらず、何故に監牢で死なねばならんや。若し七生の願いが叶うならば、支那の国で生まれんことを[14]

という詩文から黄遵憲がどれほど松陰を尊んでいたかが伺えよう。

また、「近世愛国志士歌」を賛美しようとする目的は「我が党の愛国志士を興起する」[15] ためであった。

松陰の明治維新における役割を黄遵憲は中国にこう紹介した。

> 維新以来、嘗て長州の藩士の中で、尊王攘夷によって、功績を立てた人には松陰の門人が多い。世間では、松陰が名節によって門人たちの士気を鼓舞した結果だと言われたが、今に至るまでそのことは褒め頌えられている[16]。

また、松陰を倒幕者とみなしている。

9　吉田薫、『中国現代研究叢刊』、2008 年第二期。
10　周佳栄、『清華大学学報』、1990 年第二期。
11　李慶、『復旦学報』、1994 年第四期。
12　楊理沛、『海南師範大学学報』（社会科学版）、2014 年第八期。
13　明治 43 年（1910）に出版される。
14　黄遵憲、「近世愛国志士歌」「丈夫四方志向、胡乃監牢車。倘遂七生願、祝君生支那」、銭仲聯『人境盧詩草箋注』所収、上海古籍出版社、1981 年 6 月。P.286。
15　前掲、「近世愛国志士歌」、P.100。
16　前掲、『人境盧詩草箋注』に「維新以来、長州藩士之以尊王樹勲者多其門人。世謂其以名節鼓舞士気、至今称道」とある。P.102。

松陰が最初に攘夷を主張したが、その真意は攘夷ではなく、倒幕にあった。後に尊王を主張したが、その目的は尊王ではなく、倒幕にあった[17]。

そして、黄遵憲は日本の明治維新を紹介し、当時の清末に模範を示すため、『日本国志』を書いた。そのなかで、「嘗て『ペリー日本遠征記』を観、矩方は聡明、天下の大勢を識すと謂う。日本はその人を罪に問い、真に惜しい」[18]と述べている。

当時、22才の松陰は藩主について江戸へ遊学した。そこで佐久間象山と出会い、彼について兵学を習った。その翌年、松陰は水戸藩の会沢正志斎と出会った。

1853年、ペリー来航直後、佐久間は老中の阿部正弘に『急務十条』を献策し、海軍の設置と海防防備の重要性を説いた。象山の、そういった当時まったくなかった新思想は松陰にも大きな影響を与えた。日本以外のものを知りたい、日本を強くするために外国の先進技術を実際に見て学びたい。そんな思いで、彼は師の佐久間の示唆を受けて、アメリカ艦船に乗り込み、世界の情勢を自ら確かめようと図ったが、失敗して自首し、野山獄に身を拘束される。いわゆる「下田事件」である。その時、松陰は25歳である。ペリーの『紀行』に書かれた「矩方は聡明、天下大勢を識す」は松陰の「下田事件」を指しているのだろう。

黄遵憲が『日本国志』を書いた目的は維新革命後の日本を中国に紹介するためであった。いわば、手本として、明治維新を自国の改革の参考にしようとする意識があった。ここでは、黄遵憲は松陰が自分の身を以てペリー艦船に乗り込もうとする行為を日本が欧米危機から脱出するためだと賛嘆している。また、当時清国の手本として松陰の倒幕行為を賞賛している。そのため、黄は松陰のことを「祝君生支那」と賛美した。

２．康有為の松陰像

康有為（1858～1927）は広東省海南県（現海南省）に生まれ、中国の百日維新の重要人物である。

1895年、下関条約が締結された。その時、ちょうど康有為が科挙に合格し、科挙受験者をまとめ上げて日本への徹底抗戦を上奏し、一躍、時の人となった（公車上書）。日清甲午海戦で明治日本に敗れたことは、康有為に政治改革の緊急性を認識させ、同時に短期

17　呉振清ほか整理、『日本国志』上巻・「国統志三」に「前此之攘夷、意不在攘夷、在傾幕府也；後此之尊王、意不在尊王、在傾幕府也」とある。天津人民出版社、P.91。

18　前掲、『日本国志』上巻・「隣交志下一」に「嘗観『紀行』書、謂矩方聡明、識天下大勢。日本罪斯人、真為可惜」とある。P.164。

間で改革を成し遂げた明治日本へのより一層の興味関心をかきたてることになる。彼は1896年に『日本書目志』を出版した。その中では、明治維新について特に注目している。

> 考えるに日本は昔、英・米の犯す所であり、その弱さは我が国と変わらない。しかし、今、何故に我が台湾を取り、琉球を滅ぼし、朝鮮を制し、中国から賠償金二億テールを得ることができたのか。此れ日本の軍事力が強いので、之を為したのか、非なり。其の首相伊藤、その大将大山らがこれを実現させたのか、否なり。嘗て考える所では、このような大事は、なんと一布衣高山正之が実現したのである。彼は国が衰えても変法できないことを悲しみ、将軍が政治をほしいままにしているのを憤り、一日中東京の道路で泣き続け、死んでしまった。それで、西郷（隆盛）・吉田（松陰）・藤田（東湖）・蒲生実秀らが、尊攘を唱え、大久保利通・岩倉具視・木戸孝允・板垣退助・三条実美・大隅重信が変法を談じ、日本は乃ち強盛となったである。（中略）日本の政治制度の確立、国力の強大化が、権力も勇気も智恵も手段も何も持たぬ一人の諸生が為し遂げられたとは誰が知ろうか[19]。

もともと清国と同じ弱さの日本の強盛は維新革命をしたからである。康がここで強調しているのは吉田松陰たちのごく普通の「諸生」らの努力で尊王尊攘を唱え、彼らの愛国心・憂国心によって、日本の維新革命が遂げられたことである。それこそ、康が明治日本に求めようとするものだったと考えられる。

1896年、康は黄遵憲の『日本国志』を参照し、編年体で『明治変政考』を書いた[20]。しかし、山根幸夫は康が利用した資料は全部日本書だったと論じた[21]。

康は『明治変政考』の中で松陰を尊王論者として見ている。

> 処志高山正之、蒲生実秀、吉田寅次らが死を冒して、尊王の論を主張する。西郷隆

19　中国近代史料叢刊『戊戌変法』五には「考日本昔为英美所陵，其弱与我同。今何以能取我台湾、灭琉球而制朝鲜，得我偿款二万万？此日本之兵强为之耶？非也。其相伊藤、其将大山为之耶？非也。尝推考如此大事，乃一布衣高山正之之所为。高山正之哀国之衰不能变法，愤大将军之擅政，终日在东京痛哭于通硅，终于哭死。于是，西乡（隆盛）、吉田（松阴）、藤田（东湖）、蒲生实秀之流，出而言尊攘；大久保利通、岩仓具视、木户孝充、板垣退助、三条实美、大隅重信，出而谈变法。日本乃强盛。……呜呼，谁知日本之治，盛强之效，乃由一诸生无权无勇无智无术而成之耶！」とある。台湾文海出版社、1974年、P. 411。

20　鄭海麟『黄遵憲と近代中国』、三聯書店、1988年、P.274。

21　『近代中国と日本』、山川出版社、1976年、P.14。

盛、安島帯刀、橋本左内、梅田源義らも尊王倒幕を試みたが、皆殺された[22]。

また、次のような話もある。

徳川光圀らが尊王の論を立てたため、諸志士例えば高山正之、吉田松陰、藩侯水戸斉昭、島津久光らが皆先を争って、尊王の志を明らかにした。孝明天皇は心が深く英慮があり、時々尊王維新の志士を召し出した。（中略）王権を復還させ、未曾有の大業を遂げさせ、維新の体制を打ち立てることは、全て孝明天皇が諸志士を召し出し、慰撫したことにある。それ故に、尊皇の功労は小さくない[23]。

松陰の維新における役割は康が高く評価している。

維新の功と言えば、まず松陰先生にある。激昂忠義、その（政府）首相・大臣は皆（松陰先生）門下生だ[24]。

また、松陰を明治維新の原動力とも言っている[25]。

もともと松陰の「尊王」思想には二つの意味がある。一つは幕府から政権を天皇に返還させることと、もう一つは天皇を尊んで、天下臣民を団結させ、「一君万民」の近代強大の世界を創ろうとすることである。しかし、康が理解している松陰をはじめとする諸志士の「尊王」は、天皇を尊ぶことである。彼にとって、天皇あってこそ、明治維新の成功があったという。

そのため、彼はこの書物を清の光緒帝に進呈し、「尊王」の意を強調し、光緒帝のもとで、日本の「明治維新」を模倣して、自国の「改良改革」の意思を高めようとしている。そして、清国の「改良改革」は「日本を捨てては」できないと述べている。

22　康有為『明治政変考』巻二下には「処志高山正之、蒲生実秀、吉田寅次、冒死發尊王之論。西郷隆盛、安島帯刀、橋本左内、梅田源義、皆以尊王除幕府、被誅」とある。蒋貴麟主編『康南海先生遺著彙刊・十』所収、台湾広業書局、1976 年、P.74。

23　前掲、『明治政変考』巻一には「源光圀之流作為尊王之論、於是諸志士若高山正之、吉田松陰、藩侯水戸斉昭（ママ）、島津久光等咸競起而明尊王。孝明天皇深心英慮、時々召見尊王維新之諸士。（中略）復還王権、成不世之功、開維新之治法、皆由孝明天皇多召見諸士慰撫之。故尊王之功不可没」とある。P. 36。

24　「康有為初与品川子爵書」には「向考維新之功、莫不推本於松陰先生。激昂忠義、而一時将相、皆出其門」とある。『民報』第 24 号、時評 P. 18。

25　湯志均編『康有為政論集・上』には「原功在誰手、慷慨松陰君」とある。中華書局、1981 年、P.389。

もし（我が国）保全を保って欲しければ、変法をしなければならない。変法が欲しければ、又、その過ちを恐れれば、則ち日本の手本を見ればいい。その古い政俗は、我が国と同じ。故に維新の法は日本を捨てて他の道にならず。（中略）我が国の変法はただ日本を真似すれば十分だ[26]。

ここでは、康はそれまでの改革、すなわち李鴻章や曾国藩らが主導する洋務運動を非難し、皇帝のもとで徹底した内政改革による洋務運動、つまり日本の「維新改革」をまねして「変法」による改革を主張するようになった。1898 年 6 月、時の皇帝・光緒帝から改革の主導権を与えられ、「戊戌変法」を行った。ところが、当時、清王朝の実権を握っていた西太后ら保守派の反感で弾圧され、改革は 9 月、わずか 100 日あまりで西太后のクーデターにより失敗に終わった。いわゆる「戊戌政変」という。その後、康は日本に亡命し、犬養毅、大隈重信、品川弥二郎、伊藤博文といった明治維新の著名人と親しく交友し、日本人妻まで手に入れたという。1927 年、70 歳で青島にて死去。

3. 梁啓超の松陰像

梁啓超（1873-1929）は、字は卓如、号は任公、飲氷室主人。康有為の弟子として、上海で『時務報』を発刊して中国の近代化を促す啓蒙活動を行った。1898 年 25 歳の若さで、師の康有為とともに「戊戌変法」に参加したが、当時実権を握っている西太后により「戊戌政変」で弾圧され、康有為とともに日本に亡命した。日本亡命時代、吉田松陰と高杉晋作に因んで、「吉田晋」という日本名を用いた[27]。

梁啓超と日本の関係については、狭間直樹の研究が大きい[28]。そのほかに、郭連友の「梁啓超と吉田松陰」[29]、王青「梁啓超と明治啓蒙思想」[30]、周佳栄「梁啓超と日本明治思潮」[31]、なども挙げられる。これらの著作、論文は梁啓超と日本の関係、また松陰の影響などについ

26　前掲、『明治政変考』巻二には「（我国）如欲保全、不能不変法。欲変法、又恐其錯誤、則日本為我之先駆矣。其守旧之政俗、与吾同。故更新之法、不能捨日本而有異道。（中略）吾朝変法、但採鑒於日本一切已足」とある。P.335。

27　梁啓超「梁啓超上品川弥次郎子爵書」には「啓超因景仰松蔭、東行両先生、今更名吉田晋」とある。『民報』第 24 号時評に所収、P.22。

28　『共同研究・梁啓超――西洋近代思想の受容と明治日本』、みすず書房、1999 年。

29　お茶の水女子大学：平成 18 年度活動報告書：シンポジウム編『国際日本学コンソーシアム：公開講演会「比較と交流 ― 日本学における対話と深化」』、PP.196 ～ 206。

30　『北東アジア研究』、2009 年 3 月、PP.75 ～ 86。

31　『精華大学学報』、1990 年第 2 期。PP.68 ～ 77。

て詳しく論述している。ここでは、主に松陰との関係について論じたい。

梁は早くも師の康有為の影響で、万木草堂で必読書としていた松陰の『幽室文稿』[32]を読まされた。そのことについて、梁は「梁啓超上品川弥次郎子爵書」に次のように書いている。

> 私は以前、国にいた時、康有為先生の塾で学んでいたことがある。康先生の教授法は、すべての入塾者に『幽室文稿』の内容を学ばせるものであった。曰く、苟しくも士気が衰落することがあるが、この本を読んで、自ら律することは朝の鐘、夕べの太鼓よりも効果がある。僕はこの本をもらって、毎日松陰先生と対面し、並びに貴方とも対面して、数年がたった[33]。

ここでは、梁は師の康有為の万木草堂で松陰の本をかなり学んだことが分かる。梁はほかの書物にもまたたくさんの松陰に対する関心と共感を示している。特に松陰を実践的な行動に賞賛して、「戊戌変法」はもっと緩めるべきだという当時マスコミによる指摘に反発しようとした[34]。

そのとき、梁は松陰を「革命家」として認識し、「破壊主義」を唱えようとしている。そして、「もし、（明治日本）破壊を恐れれば、今日の日本は朝鮮と同じになるだろう」と「破壊」を肯定している。明治維新という大成功の「破壊」があるからこそ、今の日本がある。そのため、梁は「日本維新主動力の第一人者は吉田松陰」と賞賛している[35]。

その時、梁は師の康有為との政見も違ってくる。1902年4月、彼は康有為宛の手紙に日本の「討幕」のように、自国も「討満」すべきだと書いている[36]。おそらく、松陰の「実践的行動」、梁から見れば「破壊行為」が梁に大きな影響を与えたのだろう。そのため、梁は自国も「改良改革」は行ける道がなくなり、一度「破壊」するしかないと考えていた。

32　『幽室文稿』（吉田松陰著、品川弥二郎編、明治十四年刊行）。

33　前掲、「梁啓超上品川弥次郎子爵書」には「啓超昔在震旦、遊於南海康先生之門、南海之為教也、凡入塾生者皆授以『幽室文稿』曰、苟士気稍偶衰落、輒読此書、勝於自暮鼓晨鐘也。僕既受此書、因日与松蔭先生相晤対、而並与閣下貴方相晤対者、数年於茲矣」とある。P.22。

34　前掲、「梁啓超上品川弥次郎子爵書」、P.23。

35　『飲氷室専集』之四には「破壊亦破壊、不破壊亦破壊。破壊既終不可免、早一日則受一日福、遅一日則一日害（中略）日本自明治元年以後、至今三十余年無破壊、其所以然者、實自勤王討幕、廃藩置県之一度大破壊来也。使其～破壊、則安知今日之日本不為朝鮮也」とある。PP.67～69。

36　「与夫子大人書」には「而所以喚起民族精神者、勢不得不攻満。日本以討幕為適宜之主義、中国以討満為最適宜之主義」とある。丁文江・趙豊田ほか偏『梁啓超年譜長編』に所収、上海人民出版社、1983年、P.286。

しかし、1903年末ごろから、梁は松陰の「破壊」者から「愛国者」に変わった[37]。また、「論成敗」には松陰の失敗者と成功者の一面を語っている。

> 日本の明治維新の一番の功労者は西郷か？木戸か？大久保か？答えは否である。伊藤か？大隈か、井上か？後藤か？板垣か？答えは否である。諸子はみんな成功者である。もし、敗者を成功者にしたら、おそらく吉田松陰しかいないだろう。吉田などの志士たちがその因を作り、明治元勲たちはその果を収める。因がなければ、当然、果もないはずである。それ故、吉田などの志士たちが明治維新の一番の功労者である[38]。

ここでは、梁啓超は松陰を「失敗」した「成功者」と肯定している。松陰の実践的な「革命行為」により、明治元勲たちが成功できたと指摘している。その続きに、彼は松陰の一生ではほとんどやりたいことに一つも成功したことがなく、しかもわずか29歳の若さで処刑されたが、松陰の死後、その門下生たちが松陰の遺志を受け、維新革命に成功したと述べている。

黄遵憲、康有為、梁啓超はそれぞれ自分のイメージで「松陰像」を作り上げた。いずれも松陰に共感共鳴をして、松陰の行動を賞賛し、これまでの洋務派運動を非難し、日本の「明治維新」をまねして、自国の「保皇」（日本でいうと尊王）「維新革命」をしようとする。松陰本人も時期によっては倒幕したり、尊王したり、攘夷したりした時がある。しかし、黄・康・梁にとって、松陰の実践的な行動自体が清国にとってまねをすべきものだと考えている。

まとめて言うと、この時期の中国では、松陰像はかなりいいイメージで、中国の未来を託していたように感じられる。要は松陰の思想から何かを得ようとするのがその特徴である。言い換えれば、もともと松陰の考えは当時の日本の現状に何かできるのではないかというかなり現実的な部分がある。その部分がちょうど黄遵憲・康有為・梁啓超らに共感共鳴を起こさせるものがあった。当時松陰は日本だけでなく、清末の英雄とも見なされてい

---

37 『飲氷室専集』之二には「吉田松陰（中略）所以愛国者未嘗変也」とある。P.26。

38 『飲氷室専集』之二には「日本維新之首功、西郷乎？木戸乎？大久保乎？曰唯唯否否。伊藤乎？大隈乎？井上乎？後藤乎？板垣乎？曰唯唯否否。諸子皆以成為成者也。若以敗為成者、則吉田松陰其人是也。吉田諸先輩造其因而明治諸元勲収其果、無因則無果、故吉田諸輩為功首也。考松陰生平欲辦之事、無一成者、初欲投西艦逃海外求学而不成、既欲糾志士入京都勤王而不成、既欲遣同志阻長藩東上而不成、事事為当道所抑圧、卒坐吏議就戮、時年不過三十、其敗也可謂至矣。然松陰死後、挙国志士、風起水湧卒傾幕府、成維新、長門藩士最有力焉、皆松陰之門人也。」とある。P.1。

た。

一方、日中戦争が終わり、現代に入ると、松陰像は一変して、英雄どころか、まさにその戦争に災いする人物に違いないと中国社会では認識された。

では、その変化は一体どうやって行われたのだろう。本文では現代中国の松陰像についての研究を通して、その変化の真実を探ってみたい。

二、現代中国の松陰像

近代中国と違って、現代中国では松陰像は一変して批判的な意見が多くなる。その時期では特に黄・康・梁のような有名人はいないが、ほとんどの学者は松陰の「革命志士」を認める一方、松陰の「海外補助論」で否定している。例えば、周頌倫の『「大陸政策」研究の諸問題について』[39]、薛子奇・周彦の『海外雄飛論――日本「大陸政策」の思想淵源』[40]、余元啓の「日本覇権主義思想源流の概述」[41]、渠長根の「19 世紀後半における日本の対華政策変化の思想根源」[42]、李東華の『近年学界における日本「大陸政策」の研究総述』[43]、張議学の『日本「大陸政策」の研究綜述』[44]、禹露の『近代日本における「大陸政策」形成の思想源流』[45]、馮天瑜の「日本における侵華戦略の歴史文化淵源」[46]、李博強の「曽根俊虎における興亜主義及び中国に対する侵略活動」[47] などが挙げられる。

なかでも特に『近年学界における日本「大陸政策」の研究総述』では日本の「大陸政策」の思想淵源、その内容と流れ、また具体的な進行方法などについて、それに関わる研究をまとめて概説と評価をしている[48]。

> 「海外雄飛論」は「大陸政策」の直接の思想淵源だと考えられる。「海外雄飛論」を出発点として、吉田松陰は「（海外）補助論」を唱えた。木戸孝允、伊藤博文はそれを具体化して「征韓論」・「征台論」にしたため、その後、台湾侵略、『台事専約』の締結、琉球の併呑、朝鮮に『江華条約』の締結といった、いろいろな

39 『外国問題研究』、1985 年 12 月。
40 『北方論叢』、1997 年第 1 期。
41 『邯鄲師専学報』、2003 年 12 月。
42 『江海学刊』、2006 年 6 月。
43 『斉斉哈爾師範高等専科学校学報』、2007 年第 5 期。
44 『世紀橋』、2009 年第 8 期。
45 『綿陽師範学院学報』、2010 年 12 月。
46 『晩晴』、2014 年 7 月。
47 『武漢科技大学学報』、2014 年 4 月。
48 前掲、『近年学界における日本「大陸政策」の研究総述』、PP.17 ～ 18。

> ことができた。（中略）1890 年、山県有朋が国会演説の時に提出した「利益線」理論は日本の侵略を指針とする国策が完全に確立された[49]。

ここでは、日本のアジア侵略戦略は完全に吉田松陰とつながり、その門下生の山県有朋も継承者として見なされる。

松陰が松下村塾で塾生達の指導に当たったのは僅か２年余りにしかすぎなかった。著名な門下生には久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿、入江九一、伊藤博文、山県有朋、前原一誠、品川弥二郎、山田顕義、野村靖、飯田俊徳、渡辺蒿蔵（天野清三郎）、松浦松洞、増野徳民、有吉熊次郎など、合計約 90 名余りが松陰の教えを受けたと言われている。松陰の指導・薫陶を受けた松下村塾門下生たちは尊王攘夷を掲げて京都で活動する者や、明治維新で新政府において大きな活躍を果たしている者がいる。山県有朋もその中の一人で、のち、明治新政府の内閣総理大臣になり、大きな役割を果たした。それゆえ、山県の「利益線論」は松陰の「海外補助論」を受けて作られたものと思われる。

松陰の「海外補助論」は「海外雄飛」の名目で出された。

> 日昇らざれば則ち昃き、月盈ざれば則ち虧け、国隆んならば則ち替ふ。故に善く国を保つものは徒にその有る所を失ふことなきのみならず、又其の無き所を増すことあり。今急に武備を修め、艦略ぼ具はり礮略ぼ足らば、則ち宜しく蝦夷を開墾して諸侯を封建し、間に乗じて加摸察加・隩都加を奪ひ、琉球に諭し、朝覲會同すること内諸侯と比しからしめ、朝鮮を責めて質を納れ貢を奉ること古の盛時の如くならしめ、北は満洲の地を割き、南は台湾・呂宋の諸島を収め、漸に進取の勢を示すべし。然る後に民を愛し士を養ひ、慎みて邊圉を守らば、則ち善く国を保つと謂ふべし[50]。

太陽は昇れば必ず落ち、月は満ちれば必ず欠けるように国もまた栄えれば衰えるものである。それゆえ国を保つにはただ持っているものを失わないようにするだけでなく、ないものを得て増やす必要がある。今、急いで武備を修め、艦船の計画を立て、銃砲の計略をきちんとすれば、きっと蝦夷開拓し、諸侯を封建し、折を見てカムチャッカ（加摸察加）、オホーツク（隩都加）を奪取し、琉球を諭し、朝覲会同させ、内諸侯と同じくし、朝鮮を

49　前掲、『近年学界における日本「大陸政策」の研究総述』、P.18。
50　「幽囚録」、山口県教育委員会編『吉田松陰全集』第一巻所収、1940 年、PP.350 ～ 351。

責めて納質させ、朝貢を行わせ、古来の盛時と同じくし、北側の満洲の土地を割き、南は台湾、フィリピン「呂宋」のさまざまな島を収め、漸進的に進取の勢いを見せなければならない。そうした後に民を愛し、士を養成し、慎重に辺境の周囲を守れば、きっと国を善く保つことができるだろう。このようにすれば、そのうちに多くの群夷が争い集まる中心に居座り、うまく足を挙げたり手を動かしたりしなくても国は変わらないだろう[51]。

この文から見れば、松陰は欧米に奪われたものを海外で奪って補助しようとしていたことが分かる。松陰はここで、北海道の開拓、琉球の日本領化、李氏朝鮮の日本への属国化、満洲・台湾・フィリピンの領有を主張しようとしている。

それについて、李泰鎮は「吉田松陰と徳富蘇峰」に次のように述べている。

> 吉田松陰は、当時西洋諸国がすぐ日本を併呑するかのような緊迫した国際情勢下にあると考えていた。また武士社会特有の緊張感も見られる。かれは『幽囚録』で孫子の兵法である「知彼知己」に何度も言及している。興味深いことに彼は克服の道を他国、他者の奪取に求めた。ロシアのカムチャッカとオホーツク、オーストラリア、朝鮮と満洲などがその対象として挙げられる。蝦夷（北海道）の開拓はカムチャッカ、オホーツク進出のための前線基地確保と見られ、オーストラリアへの進出は英国との競争関係から考え出されたものであり、ともに興味深い。朝鮮と満洲への進出は歴史の中からその根拠を引き出している。すなわち朝鮮は本来古代日本の盛代に「臣属」として朝貢したが、いつの日か行われなくなった。そのため朝鮮を咎め、人質を送らせ、昔のようにもう一度朝貢させる必要がある。その後これを土台にして満洲へ進出しなければならないとした。神功皇后の新羅征伐、つまり征韓の歴史が明示されたのである[52]。

松陰は「同士一致の意見」として兄に送った「獄是帳」に次のように記している。

> 「魯・墨講和一定す、決然として我れより是れを破り信を戎狄に失ふべからず。但だ章程を厳にし信義を厚うし、其の間を以て国力を養ひ、取り易き朝鮮・満洲・

51　訳文は吉野誠『明治維新と征韓論――吉田松陰から西郷隆盛へ』参照、明石書店、2002年、PP.56～57。

52　『都留文科大学研究紀要』第80期、2014年10月、PP.180～181。

支那を切り随へ、交易にて魯国に失ふ所は又土地にて鮮満にて償ふべし」[53]

ここでは、ロシア、アメリカとの和親条約を厳守して、破ってはならないことをいっている。また、国力を養い、ロシア・アメリカに損なわれたものを朝鮮・満洲から補助してもらうと唱えている。これが松陰の有名な「海外補助論」である。松陰の「雄略」と呼ぶ、この海外への領土拡張の主張を、当然、現代中国知識人から見れば、「侵略理論」としかいいようがないだろう。

また張議学の『日本「大陸政策」の研究綜述』には、当時の学者たちの研究がまとめられている。特に「大陸政策」の内容をいろいろな意見で詳しくまとめている。例えば、一つは周永生、薛子奇・周彦、商鳴臣、周頌倫、黄定天などの「武力拡張、領土併呑、特に中国大陸への拡張を目的とする」との持論である。もう一つは李良玉、劉金萍などの「海外拡張の目的は海外市場の開拓と原材料の確保、そして海外への経済拡張にある」との持論である。しかし、どちらの持論も「大陸政策」は吉田松陰の「海外補助論」とつながり、その淵源があるという[54]。

そのほか、馮瑋の「“尊王攘夷”から“尊王拡張”へ」では近代日本が尊王攘夷から尊王のもとで海外への領土拡張をしようとすることを批判している。もちろん、吉田松陰の「海外補助論」も批判されている。特に朝鮮との合併、「満洲国」を成立させること、そして、台湾への殖民化などはみな「尊王」の名義で行われている。そして、皇民化教育をさせ、日本の本土化をしようとし、最終的に海外拡張を目的にする、と批判している[55]。

それと同じように批判をしている論文も少なくない。例えば、郭雪雲・王緒淵「簡論日本海外開発論及其影響」[56]、王向遠「江戸時代日本民間文人学者の侵華迷夢——近松門左衛

53 「安政二年四月二十四日付書簡」。前掲、『吉田松陰全集』第八巻所収、P.423。

54 前掲、『日本「大陆政策」の研究综述』、P.45。詳しくは、周頌倫「近代的基本国策——大陸政策」、『江海学刊』、2004 年第 1 期、P.151；薛子奇・周彦『海外雄飛論——日本「大陸政策」的思想淵源』、『北方論叢』、1997 年第 1 期、P.62；戴裕民「日本軍国主義及其侵略拡張本質」、『中国青年政治学院学報』、2006 年第 6 期、P.78；周永生「日本大陸政策思想探源」、『世界歴史』、1989 年第 2 期、；陳樹涵「民族優越論：日本対外侵略的重要思想源流」、『史学月刊』、2002 年第第 12 期、P.123；張志傑・孫克復「試論日本大陸政策の形成」、『遼寧大学学報』1991 年第 3 期、PP.36 ～ 37；易顕石『九・一八事変史』、遼寧人民出版社、1982 年；黄定天「論日本大陸政策和俄国遠東政策」、『東北亜論譚』、2005 年第 7 期、P.86；劉金萍「日本財界与大陸政策」、『甘粛社会科学』、1999 年第 4 期、P.64 などの文を参照したい。

55 『日本学刊』、2002 年第 2 期、PP.129 ～ 141。

56 『荷澤学院学報』、2007 年 6 月、PP.68 ～ 71。

門、佐藤信淵、吉田松陰を例にして」[57]、廖艶楓「解読日本軍国主義」[58]、李若愚「近代初期日本的対外認識与領土観的形成」[59]、安善花「近代日本侵略中朝思想中的民族優越論分析」[60]、劉江永「歴史教訓与21世紀的東亜合作――論日本近代亜洲観的変遷」[61]、唐若玲「略論日本大陸政策形成的歴史原因」[62]、肖伝林「論近代日本軍国主義的形成」[63]、周彦「論日本近現代右翼思潮的演変」[64]、苑基栄「浅析日本大陸政策形成的思想淵源」[65]。

これらの論文には「海外拡張論」（「海外雄飛論」・「海外補助論」）は松陰が始めて唱えたものでなく、工藤平助、林子平、本多利明、佐藤信淵らが最初に生み出されたものだと述べている。工藤の「ロシア南進」、「蝦夷開発」、林子平の「三国開発（朝鮮、琉球、蝦夷）」、本多の「長期開拓制度（殖民制度）」、佐藤の「中国征服論」、そして、松陰の「朝鮮・満洲の補助論」、また、その弟子の山県有朋の「日本の利益線論」などは日本の「海外拡張」の承継関係があり[66]、国策として定められたと分析している。

中でも、特に松陰の弟子たちがのちに明治政府の総理、閣僚までの役割を果たしている人が多いので、松陰の唱えた「海外拡張論」を批判するものがほとんどである。

おわりに

中国の松陰像は大きく二つに分けられる。つまり、前期の近代中国では、黄遵憲の「倒幕」、康有為の「尊王」と梁啓超の「革命」といった「松陰像」である。しかし、現代中国では、「松陰像」は一変して、「幕末志士の松陰像」を認めた一方、「軍国主義者」・「侵略理論者」とも言われている。

前にも述べたように、松陰の思想は日本の欧米危機を前に日本はどうするべきかという現実的な考えである。そのため、日本の維新革命をまねようとする黄遵憲、康有為、梁啓超たちにとって、松陰はまぎれもなく、いい手本になるに違いない。いわば、松陰の考えに共鳴しているのである。

一方、現代中国では、日中戦争は松陰の「海外雄飛論」「海外補償論」の影響があって、

57　『重慶大学学報』、2008年第14巻4期、PP.120～124。
58　『引進与咨詢』、2006年第8期、PP.49～50。
59　『歴史研究』、2013年第3期、P.151。
60　『東北亜論譚』、2012年第1期、P.65。
61　『亜非縦横』、2006年第2期、PP.22～43。
62　『海南師範学報』、1997年第1期、PP.112～114。
63　『江漢論譚』、1996年第7期、P.13。
64　『大連近代史研究』第9巻、2012年9月、PP.28～37。
65　『中国社会科学院研究生院学報』、2009年第2期、PP.137～144。
66　孫躍珠「山県有朋対吉田松陰思想和政策的継承」、『南開学報』、2003年第3期、PP.62～63。

その門下生や後輩たちにも影響を与えた結果、その戦争とつながると認識されたから、松陰に対するイメージが低下してくる。特に、松陰の「海外雄飛論」・「海外補償論」は戦時中、朝鮮半島を経由し、満洲を拠点とし、中国全土に目を向けようとする結果とほぼまったく同じなので、松陰の幕末志士の一面が軽くなり、その「侵略性」が強調されている。

同じ人物に対する認識が時代とともに変わってくるのはやはり、その時代の政治に関わる。黄・康・梁たちが清の「維新改革」のために、吉田松陰の考えに共感し、「松陰像」を限りなく、賛美しようとしている一方、日中戦争で、吉田松陰の「海外雄飛論」「海外補償論」といった考えがもとで、「松陰像」のイメージが低下したからであろう。

当然、日本でも時代とともに、「松陰認識」はいろいろと変わってくる[67]。しかし、学術レベルでの「松陰像」の研究は政治要素を除いて、もっと客観的な研究が必要だと思われる。「松陰像」に関しては、客観かつ公平的な研究が、これからの中国人研究者たちにとって、意味のある課題だと考えられる。

67　これについて、唐利国「論日本近代時期吉田松蔭像的編成」、『湖北民族学院学報』、2008 年第 8 期、PP.149 ～ 154。また、郭連友「近代中国における吉田松陰認識 ――清末改良派を中心に――」（玉懸博之編『日本思想史――その普遍と特殊』ぺりかん社 1997 年 7 月）、「近代中国における吉田松陰――革命派と民国期の松陰論をめぐって――」（東北大学文学会編『文化』第六十二巻、第三、四号、1999 年 3 月）、そしてまた拙稿の「吉田松陰の人間像について」（大阪府立大学人文学会『人文学論集』第 22 集、2004 年）に詳しく論じられている。